

ブラジルへの戦後花嫁移住

—日本力行会「南十字会」を事例として—

飯 田 耕二郎

はじめに

1. 南十字会の発足とその活動
2. ブラジルへの渡航者と南十字会その後
3. その後の歩み

はじめに

第二次大戦後の南米への移民は、1952年のサンフランシスコ講和条約の発効によって日本が独立を回復し、同年よりブラジルへの移民が再開された。続いて、パラグアイ、ドミニカ、ボリビアなど、南米の国々への移民が送出された。しかし、1961～62年にドミニカへの移民が失敗して帰国したことや、日本が急速に経済復興を遂げるようになったため、日本人の移住はこの頃から次第に減少していった。かわって1988年頃からブラジルからの日系人の日本への出稼ぎが本格化し、それに続いて他の南米諸国からの日系人労働者も日本にやってくるようになった。ブラジルへの移民についていえば、表1にみられるように1952年の移住再開から1993年までの移民総数は5万3000人強で、1959年の約7000人をピークに減り始め、1964年には1000人、さらに1982年には100人を割ってしまっている¹⁾。

さて戦後の花嫁移住については、アメリカ合衆国やオーストラリアへの移住についていくつかの研究成果がみられるが、主な著作として次の2点を挙げることができる。

- ① 林かおり、田村恵子、高津文美子『戦争花嫁—国境を越えた女たちの半世紀』（芙蓉書房出版、2002年）
- ② 安富成良、スタウト・梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁—日米国際結婚パイオニアの記録』（明石書店、2005年）

いずれも進駐軍兵士と結婚した日本人花嫁についてのものである。

ブラジルについては最近次のような本が出版された。

小野政子他5名『女たちのブラジル移住史』（毎日新聞社、2007年）

これは戦前から1990年代までに渡った女性6人の回想記をまとめたもので、このうち戦

1) 『日本ブラジル交流史』（社団法人日本ブラジル中央協会、1995年）および岡部牧夫『海を渡った日本人』（山川出版社、2002年）など。

表1 ブラジルへの移住者数 (戦後・事業団扱い分)

年度	移住者数	年度	移住者数	年度	移住者数
1952年	54人	1970年	454人	1990年	23人
1953年	1,480人	1971年	456人	1991年	22人
1954年	3,524人	1972年	557人	1992年	16人
1955年	2,657人	1973年	383人	1993年	10人
1956年	4,370人	1974年	297人	計	53,657人
1957年	5,172人	1975年	299人	(出所) 国際協力事業団 海外移住統計	
1958年	6,312人	1976年	353人		
1959年	7,041人	1977年	283人		
1960年	6,832人	1978年	298人		
1961年	5,146人	1979年	230人		
1962年	1,830人	1980年	188人		
1963年	1,230人	1981年	161人		
1964年	751人	1982年	61人		
1965年	531人	1983年	84人		
1966年	785人	1984年	60人		
1967年	638人	1985年	45人		
1968年	442人	1986年	51人		
1969年	434人	1987年	40人		
		1988年	33人		
		1989年	24人		

後、花嫁で移住した人が2人含まれている。

ブラジルへの戦後花嫁移住に限っていえば、コチア青年移民の花嫁が有名である。コチア青年移民というのは、サンパウロ近郊にある南米最大の組合であるコチア産業組合の創設者であった下元健吉専務理事の創案になるもので、ブラジル農業の発展のため若い後継者が必要と考え、日本の青年移民の導入の必要を訴え、1500名の移住枠をブラジル政府に申請して許可された。そして日本の各県農業組合長の推薦する組合員の子弟で18歳から24歳までの青年をブラジルに移住させる途を開いた。各地の農協を通じて募集が行なわれ、農協中央会が選考し、一定の訓練期間を経て、ブラジルに渡り、コチア産業組合が指定した組合員農家に配耕された青年たちは、原則的に4年間の就労が義務付けられた。その後、配耕された組合員農家(パトロン)や組合の協力により独立することになっていた。このコチア青年移民は、1955年以来58年までの第1次1519人と、59年から67年までの989人を合わせて2508人が14年間にわたってブラジルに渡ったが、コチア青年の独立当時の一番大きな問題は、結婚相手であった。そこでコチア産業組合は、1963年拓殖部に結婚相談室を設け、66年結婚相談員を日本にも派遣した²⁾。その結果、日本から花嫁を呼び寄せたのが約500名(25%)、一番多

2) 『コチア青年の20年』(コチア青年連絡協議会、1975年)、および『ブラジル移民戦後移住の50年』(ブラジル・ニッポン移住者協会、2004年)。

いのが現地の日系2世・3世と結婚したのが約960名(48%)、そして現地在住の一世400名(20%)、ブラジル人と結婚したのが110名程(5.5%)で、独身者30名(1.5%)となっている³⁾。

また移民送り出しの団体としては、「海外移住婦人ホーム」というのが、1954年に神奈川県辻堂駅近くに設立された。小南清・東大農学部教授とミヨ子夫妻によるもので、1961年に外務省認可財団法人となり、1975年には「財団法人国際女子研修センター」が神奈川県湘南海岸の近くに建設された。募集対象者は原則として19歳から30歳までの女性で、最初60日間研修で年3回募集していたが、後に年45日間研修、年2回募集に切り替えられた。募集人員は20名である。1985年頃の時点で、南米の国々をはじめアメリカ、カナダ、オーストラリアなどに約370名の花嫁を紹介したという⁴⁾。

以上のような戦後のブラジルなど南米地域への主だった花嫁移住についての概略的な紹介はあるものの、組織としての花嫁移住の送出について詳細な研究はなされていないように思われる。筆者は、戦前・戦後にかけて移民を多数送出してきた日本力行会という団体の歴史について従来より関心を持ち、その海外移住史料室でたびたび史料の収集を行ってきた。昨年度たまたま、日本力行会の内部の組織で戦後の花嫁移住の送出団体であった、「南十字会」に関する資料をそこの職員から寄贈されたのを契機に、これまでほとんど手付かずだったブラジルへの団体による花嫁移住について調べることにした。

1. 南十字会の発足とその活動

日本力行会を創設した島貫兵太夫は、仙台出身で東北学院卒業、救世軍の影響を受け、1897（明治30年）に苦学生の救済を目的に「東京労働会」を発足させた。これがこの会の始まりで、名称がいくつか改められ、1900（明治33）年に、小石川原町に事務所を移して、名称を「日本力行会」（以下、力行会）とした。この会の運動は、やがて海外移住者の教育、援助へと拡大、本部を駕籠町へ移転し、「渡米部」「力行女学校」「日本実業学校」などの海外移住者の教育施設を開設、また会の機関紙「力行」「渡米新報」を発行して、全国の苦学生の救済、海外移住の啓発を行い、明治期すでに数千人が力行会を経て合衆国をはじめ海外に渡った。

1913（大正2）年、島貫初代会長の死後、二代会長の永田稠は事業を拡張し、現在の小竹町に本部を移して、「力行海外学校」「力行商業学校」を開設する一方、1924年にブラジルのアリアンサ集団移住地を創設、これがブラジルへの自作農入植移民拡大の契機となり、以後ブラジル各地に日本人移住地が続々開設されることになった。昭和に入って旧満州に「力行農園」と「力行村」を開設した。力行村は、現地中国人と農業技術・生活文化の面で交流・互助し、国策移民とは趣を異にしていた。このように力行会は、青年の移民を主として北

3) 「永遠の老人—『コチア青年』の三十年」『海外移住』（1985年10月）

4) 小南ミヨ子『海外に飛び立つ花嫁たち』（講談社、1986年）

5) 奥村直彦「島貫兵太夫の力行思想—その形成過程と移民事業への展開」（同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、1991年）所収）、および『日本力行会百年の航跡』（財団法人日本力行会、1997年）など。

米、中南米、旧満州など世界各地に送り出し、戦前すでにその数は1万人に達していた⁵⁾。

戦後になって、力行会は1954年に「南米開拓講習所」を開設した。それは力行会で17歳以上25歳未満の独身青年を3ヶ月間学寮に起居させ訓練、準備教育をして、現地ブラジルの農家等で2年間の実習を引き受けてもらい、その後に現地で独立して働くというもので、1960年頃には700名程の移民を送出していた。彼等はほとんどが、日本から嫁をもらいたいという希望を抱いていた。1960(昭和35)年の早春、力行会に入会し海外移住を志して「南米開拓講習修所」に在籍者のうち、同年1月入会の間宮利彦たちの発案で、池袋の繁華街で移住花嫁募集のビラを配ったところ、これが毎日新聞の記事として取り上げられて脚光を浴び、意外なほどの効果をあげ、全国から問い合わせが殺到した⁶⁾。

そこで力行会に女性の団体である「南十字会」が4月に発足した。名前は、名古屋市に海外移住研究グループ「南十字星友の会」が1年前に発足していたのを真似て名付けられたという。5月28日に南米開拓講習修所第69期生(1960年3月入会)の井田善孝と南十字会の地方会員に準ずる菊池磨知子が力行会で結婚をあげた。このときの出席者は南十字会員約30名、講習生40名、力行会関係者10名、計80名であった。6月には第1回の例会が開催された。以後、毎月第3日曜日に例会が定期的に開かれ、南米事情の研究や講習、社交ダンスやフォークダンスなどの会員相互の親睦が行われた。参加者は毎回男30人前後、女25人前後であった。また、毎月1回は送別会があり、その外にも、本会を訪れて移住希望の会員同士で知り合いになる機会が与えられるようになった。しかし地方在住者にはそのチャンスがないので地方会員制が設けられ、当初その会員も20名ほどいた。同月には機関紙「南十字会だより」第1号が発行された。先の結婚第1号や地方会員制のできたという記事がみられる。そして7月4日にはブラジル丸で最初の花嫁移住4名がサンパウロに向けて出発した⁷⁾。

2. ブラジルへの渡航者と南十字会その後

1970年頃に発行された「南十字会名簿」をもとに、この会からの渡伯(ブラジル=伯刺西爾への渡航)人数は表2のようであった。

やはり会の発足当時の1960年頃がピークとなっており、60年代後半は減少の傾向である。それとともにブラジル以外への転住もみられるようになり、船から飛行機での渡航も行われるようになった。

この名簿には会員の名前と渡航年月日が記載されているが、そのうちその後の消息など略歴が林寿雄『ブラジル力行会全史』(ブラジル力行会、1992年)の「ブラジル力行会名鑑」に掲載されていたり、「南十字会だより」に紹介されている人物について年次別にまとめたのが次の一覧表である。姓名はイニシャルで表示したが、各人の出身地・学歴・職歴・力行会の入会年月・渡伯(伯刺西爾=ブラジルへの渡航)年月・船便名・ブラジルでの職歴など知れる範囲で記載した。

6) 前掲『日本力行会百年の航跡』、および「毎日新聞」(昭和35年3月13日夕刊)記事。

7) 「南十字会だより」および「南十字会案内」の記事。

表2 年次別渡伯者数

1956年	2名	1966年	4名（パラグアイ在住1名、メキシコ在住1名含む）
1958年	2名	1967年	7名（アルゼンチン在住1名含む、飛行機で渡伯した者1名）
1959年	5名	1968年	4名
1960年	13名（7月以前に渡伯した者3名含む）	1969年	4名（アルゼンチン在住1名含む）
1961年	10名	1970年	3名（飛行機で渡伯した者1名）
1962年	8名（エクアドル在住1名）	不明	4名（アルゼンチン在住1名、再渡伯1名含む）
1963年	9名	計	88名（うち本人死亡2名、夫死亡3名、日本帰国13名）
1964年	8名（アルゼンチン在住1名含む）		
1965年	5名		

「南十字会名簿」をもとに飯田作成

渡伯会員の履歴

〔1956年渡伯〕

1. N.K 旧姓T、東京都三宅島坪田村、三宅高校卒業、文化服装学校を経て、1955年力行会に入会、1956年1月に渡伯、初めモジ・ダス・クルゼスに入植、後にT.Kと結婚、現在タウバテに在住。夫は岡山県英田郡美作町出身、勝間田高校卒業後、1955年？力行会に入会、1956年4月アフリカ丸で渡伯、タウバテで商業。
2. A.I 旧姓N、長野県長野市出身、清泉女学院高校卒業、1956年6月力行会に入会、同年10月チチャレンガ号で渡伯、最初長谷氏宅にいて、S.Iと結婚、ビトリア市に在住、一男四女の母、長女はファッション・デザイナーとして訪日。夫は新潟県糸魚川市出身、新潟県警察学校卒業後、1956年5月力行会に入会、同年10月アフリカ丸で渡伯。住所・職業を転々とした後、農業・肥料販売業。

〔1958年渡伯〕

3. R.I 静岡県若東松町？出身、大妻技芸学院卒業、看護婦12年の後、1958年6月渡伯、Y.Iと結婚、サンパウロ市在住。
4. Y.A 1958年10月渡伯、S.Aと結婚。夫は愛知県幡豆郡一色町出身、早稲田大学中退、1958年1月力行会に入会、同年10月のアルゼンチン丸で渡伯（妻と同船）、職業を転々とした後、保健サービス会社経営。

〔1959年渡伯〕

5. H.M 富山県下新川郡朝日泊出身、泊高校出身、1959年6月ブラジル丸で渡伯、S.Mの呼寄せ結婚、その後夫婦で帰国。夫は富山県下新川郡朝日町出身、中央大学卒業、1955年5月力行会に入会、1956年軍艦マリ・パレイラ号で渡伯、最初東山農場、後に豊和工業で働く、帰国後死去。
6. S.N 1959年7月渡伯、T.Nの呼寄せ結婚。夫は愛知県南設楽郡作手村出身、小学校卒業後、農業に10年従事、1959年1月力行会に入会、同年7月アルゼンチナ丸（妻と同

船)で渡伯、ベロ・オリゾンテで働く、別居中。

7. T.S 旧姓K、大妻学院卒業、T.Sの呼寄せで1959年8月渡伯、結婚。夫は福島県河沼郡八幡村出身、拓殖大学卒業、1953年力行会に入会、1954年アメリカ丸で渡伯、最初スザノの石川農場で就労、レジストロに行き結婚、その後コチア産業組合に移る。二男三女あり。

[1960年渡伯]

8. Y.H H.Hと結婚、1960年2月ブラジル丸にて夫婦で渡伯。夫は神奈川県小田原市出身、城内高校卒業、建築業5年、庭園業7年後、1959年7月力行会に入会、1960年渡伯後、サンパウロで鉄工場に就労。
9. H.G 熊本県飽託郡天明村出身、病院看護婦、1960年2月S.Gの呼寄せで渡伯、結婚、リオ在住、二男一女あり。夫は愛知県知多郡武豊町出身、日大卒業、1954年6月力行会に入会、同年9月アメリカ丸で渡伯、1958年リオ獣医科大学聴講生となり、1959年国家試験に合格、リオで獣医院開業。
10. Y.T 旧姓S、1960年7月渡伯、B.Tと結婚。夫は大阪市阿倍野区出身、高校卒業後、豊職、1960年2月力行会に入会、同7月ブラジル丸(妻と同船)で渡伯、最初モジ・ダス・クルゼスで農業、その後3回移転して、現在ラポーゾ・タバレスに居住。一男一女あり。
11. T.W 1960年8月渡伯、M.Wと結婚。夫は茨城県水戸市出身、新制高校卒業後、公務員(検察業務)8年間の後、1960年4月力行会に入会、同8月アルゼンチナ丸(妻と同船)で渡伯、最初サン・アントニオ・デ・ピニャルの木村農場に夫婦で入植、後モジ・ダス、クルゼスの幸村農場に移り、その後帰国。
12. T.N 1960年8月渡伯、K.Nと結婚。夫は東京都品川区出身、高校電気科を卒業、5年間食肉業店員、自動車運転手の後、1960年4月力行会に入会、同8月アルゼンチナ丸で妻と渡伯、その後不明、後帰国。
13. Y.F 1960年10月渡伯、A.Fと結婚。夫は神奈川県足柄上郡山北町出身、農林高校中退、自衛隊員、1960年5月力行会に入会、同年10月アフリカ丸で妻と渡伯、モジ・ダス・クルゼスの本多農場に入植、後バルゼン・グランデの三上農場で働く。
14. C.Y 1960年12月渡伯、I.Yと結婚。夫は福岡県甘木市出身、中学卒業後、農業7年、自衛隊員、1960年8月力行会に入会、同年12月アルゼンチナ丸で妻と渡伯、カンピナスの石原農場に入植、その後帰国。
15. M.I 旧姓K、1960年12月渡伯、J.Iと結婚。夫は長崎県北松浦郡田平町出身、高等小学校卒業、農業6年半、自衛隊員7年半などの後、1960年9月力行会に入会、同年12月アメリカ丸で妻と渡伯、モジ・ダス・クルゼスの木村農場に入植。その後不明。
16. N.A 旧姓I、1960年12月渡伯、K.Aと結婚。夫は千葉県君津郡天羽町出身、家業の製パン業7年の後、1960年9月力行会に入会、同12月アメリカ丸(妻と同船)で渡伯、サンパウロ市の梅津氏の所で働いていたが、1961年交通事故にて死亡。

[1961年渡伯]

17. N.U 旧姓I、1961年2月渡伯、M.Uと結婚。夫は新潟県西蒲原郡岩室村出身、高等小学校卒業、農業10年、東京で食堂経営5年後、1960年力行会に入会、1961年2月サント

ス丸（妻と同船）で渡伯、最初アストルガの馬場農場に入植、その後転々とし現在グワルリョス方面？（住所不明）。

18. C.K 旧姓S、東京都出身、1961年6月アメリカ丸で渡伯、モジの生田方に入植、後にS.Kと結婚。
19. K.K 旧姓H、新潟県出身、1961年3月M.Kと結婚、同年7月夫婦同伴ブラジル丸で渡伯。夫は静岡県浜松市出身、高校中退、自衛隊勤務5年、1960年12月入会、渡伯後具グアルリョスの久保田農場に入植、その後スザノに移り日語教師をしたが、帰国。
20. A.S 旧姓H、病院勤務、1961年3月T.Sと結婚、同年7月ブラジル丸で渡伯。夫は神奈川県横須賀市出身、大学卒業、病院勤務、1961年1月力行会に入会、同年7月ブラジル丸で渡伯（妻と同船）、コチア産業組合に就労したが、間もなく帰国。
21. Y.F 旧姓S、1961年9月サントス丸で渡伯、K.Fと結婚。夫は京都市上京区出身、家業の呉服店で5年の後、1960年5月力行会に入会、同年9月のサントス丸で渡伯、イタカケセツバの篠田農場で働き、後画家としてイタイン・パウリスタに在住。
22. S.S 長野県北佐久郡立科町出身、1961年9月サントス丸で渡伯、R.Sと結婚、マット・グロツのロンドノポリスに在住。

[1962年渡伯]

23. C.I 旧姓I、東京都出身、高校卒業、機械検定協会勤務、1962年2月渡伯、K.Iと結婚。夫は千葉県佐原市出身、1960年日本TV技術専門学校卒業、西沢製作所勤務後、1961年7月力行会に入会、1962年2月サントス丸（妻と同船）で渡伯、最初イタカの篠田養鶏場に就労、後にサンパウロに出て、TVラジオのアフター・サービスの仕事に就く、1976年より三洋電機直系のアフター・サービス会社を共同設立、ブラジル力行会副会長。家庭は二女一男。
24. H.T 旧姓K、群馬県桐生市出身、桐ヶ丘学園高校卒業、ミシン刺繍業、I.Tと結婚。1962年2月サントス丸で渡伯。
25. S.M 旧姓K、茨城県水戸市出身、恵泉女学園高校卒業、1962年2月サントス丸で渡伯、ピネイロスのS.Mと結婚。夫は東京都北多摩郡東村山町出身、日本大学農獣医学部卒業、小学校教員4年、会社員2年の後、1959年8月力行会に入会、同年12月アフリカ丸で渡伯、最初アリアンサの浅田養鶏場で就労、次にサンパウロに出てピネイロスですし店開業後、リオのホテルの料理部で働く。
26. Y.K 旧姓M、大分県立中津西高校卒業、1962年2月サントス丸で渡伯、K.Kと結婚。夫は新潟県東頸城郡大島村出身、高校卒業後マネキン製造7年、1961年力行会に入会、1962年2月サントス丸（妻と同船）で渡伯、イタカの篠田養鶏場に入植、パラナ州クリチーバで農業、サンタ・カタリーナ在住。
27. T.T 旧姓E、福島県田村郡田村町出身、中学卒業、会社勤務後、H.Tと結婚のため、1962年5月アフリカ丸で渡伯、アナポリスで夫と共に農業に従事。
28. K.K 1962年9月ブラジル丸で渡伯、ベロ・オリゾンテのウジミナスに勤務中のH.Kと結婚。夫は埼玉県羽生市出身、東京電機大学高校卒業、1958年1月力行会に入会、同年9月ブラジル丸で渡伯、モジ・ダス・クルゼスなどを経て、1961年よりウジミナス社に入社、工場係長など歴任。三男一女あり。

29. I.I 旧姓T、宮城県登米郡東和町出身、中学卒業、Y.Iと結婚、1962年12月渡伯、エ
クアドルに転住。
〔1963年渡伯〕
30. H.A 1963年1月力行会に入会、同年2月サントス丸で渡伯、T.Aと結婚。夫は静岡
県浜松市出身、浜松西高校卒業、埼玉農民講道館に入り、1960年3月力行会に入会、1963
年2月サントス丸（妻と同船）で渡伯、最初ゴヤス・トリンダーデの沖上農場で就労、ブ
ラジリアに移って後、1973年温泉町カルダス・ノーバス商業を始める。二男二女あり。
31. M.K 旧姓S、東京都大田区出身、都立一橋高校卒業、会社5年勤務、1963年2月サ
ントス丸で渡伯、最初アリアンサに入植、後マツト・グロソンのクヤバに移転、TKと
結婚、二男二女あり。
32. S.T 旧姓Y、山口県下関市出身、大分県立宇佐高女卒業、会社勤めの後、1963年5
月ブラジル丸で渡伯、南米銀行勤務、後東京銀行重役のN.Tと結婚。
33. T.T 旧姓S、横浜市神奈川区出身、中学卒業、メイド、力行会講習所を卒業し、
1963年7月サントス丸で渡伯、H.Tと結婚。夫は福岡県築上郡椎田町出身、中学卒業
後、菓子製造5年、農業4年の後、1960年8月力行会に入会、同年12月アルゼンチナ丸で渡
伯、モジで就労、カンピナスに移った後、パウリーニャで花卉栽培。
34. K.I 旧姓S、力行会講習所卒業、S.Iと結婚、1963年7月渡伯。夫は東京都板橋区出
身、1962年5月横浜国立大学中退と同時に力行会に入会、講習所卒業し結婚、1963年7月
サントス丸（妻と同船）で渡伯、スザノなどを経てブラジリアで大農場を経営。二男五女
あり。
35. H.H 旧姓K、長野県南安曇郡三郷村出身、新制中学卒業後、看護婦として8年間働
く、1963年7月サントス丸で渡伯、サント・アンドレのK.Hと結婚。
36. S.W 旧姓K、岩手県江刺市出身、岩谷堂高校卒業、1963年8月サクラ丸で渡伯、
K.Wと結婚。
37. C.S 旧姓E、長崎県南高来郡口之津町出身、都立白崎高校卒業、1963年12月サクラ
丸で渡伯、S.Sと結婚。
38. T.T 旧姓S、静岡県沼津市出身、沼津高校卒業、高等看護学院卒業、病院勤務4
年、1963年3月力行会に入会、同年12月サクラ丸で渡伯、T氏と結婚したが、間もなく帰
国。
〔1964年渡伯〕
39. A.N 旧姓E、埼玉県北葛飾郡杉戸町出身、女子高校卒業、力行会開拓講習所卒業、
1964年3月アフリカ丸で渡伯、Z.Nと結婚、後に夫婦でアルゼンチンに転航。夫は福島
県伊達郡桑折町出身、農業高校中退、1963年1月力行会に入会、1964年3月アフリカ丸
（妻と同船）で渡伯、スザノの梅本農場に入植、後アルゼンチンのブエノスに転航。
40. T.T 東京都品川区出身 中学卒業後美容師4年余、K.Tと結婚するため同行。夫は
東京都品川区出身、中央大学卒業、大和証券に1年間余勤務後、1963年7月力行会に入
会、1964年4月アメリカ丸で渡伯、最初コチアの加藤農場に入植、1965年バルゼン・グラ
ンデに転居、1980年よりピエダーデに移り農業。
41. K.S 旧姓S、栃木県河内郡上河内村出身、法政大学卒業、食生活改善協会入所後、

力行会より1964年7月サントス丸で渡伯。

42. M.K 旧姓H、山形県鶴岡市出身、桐生女子高校卒業、力行会を通じて1964年7月サントス丸で移住、カンピーナス花岡農場入植、J.Sと結婚、後にイタカセツーパーの篠田養鶏場で働く、主人没後、K氏と再婚、イタイン・パウリスタに在住。
43. F.S 岩手県立花巻高校？卒業、美容室勤務の後、力行会を通じて、1964年10月サクラ丸で渡伯、T.Sと結婚、ウジミナスにいたが、その後帰国。
44. K.H 旧姓I、福岡県中間市出身、広島女子短大卒業、1964年4月力行会に入会、同年10月サクラ丸で渡伯、アリアンサの上条農場などで就労、S.Hと結婚。
45. K.S 旧姓T、愛知県名古屋市出身、Z.Sの呼寄で1964年12月サントス丸で渡伯、Z.Sと結婚。

[1965年渡伯]

46. H.S 旧姓M、新沼中央？高校卒業、山下汽船会社に勤務の後、力行会を通じて、1965年2月サクラ丸で渡伯、S.Sと結婚、その後帰国。夫は福井県鯖江市出身、鯖江高校卒業、農業2年後、1959年7月力行会に入会、同年11月アルゼンチナ丸で渡伯、モジ・ダス・クルゼスで農業、後に帰国。
47. M.B 旧姓S、K.Bの呼寄で1965年5月アルゼンチナ丸で渡伯、K.Bと結婚。夫は福岡県大牟田市出身、福岡大学卒業、1962年4月、力行会に入会、同8月アルゼンチナ丸で渡伯、レジストロの角田農場で10年就労、1972年より日語学校教師、その後サンパウロに出て、教師をしながらベンソンを経営。三男二女の家族。
48. M.S 旧姓H、福岡県英和女学院卒業、1965年6月サクラ丸で渡伯、R.Sと結婚、ブラジル力行会の事務所に滞在していたが、スペインに転住、その後帰国。夫は大阪市西区出身、奈良県立郡山高校卒業、農業7年、1963年9月力行会に入会、1964年3月アフリカ丸で渡伯、滋野養鶏場で働くが、後にスペインのバルセロナに転住。
49. Y.I 旧姓Y、仙台市出身、岩切中学卒業、力行会は1965年5月入会、同9月ブラジル丸で渡伯、Y氏と結婚、直ちにパラグアイのエンカルナッションに行く。
50. N.A 旧姓N、東京都渋谷区出身、高校卒業、力行会を通じ1965年9月ブラジル丸で渡伯、ブラジルに在住。

[1966年渡伯]

51. K.I 旧姓Y、福岡県筑紫郡筑紫野町出身、雙葉高校卒業、1966年5月ブラジル丸で渡伯、I.Iと結婚、アリアンサに在住。
52. H.I 旧姓H、東京都文京区出身、文化学園高校卒業、1966年11月アルゼンチナ丸で渡伯、1972年夫のT.Aが死去したため、同年3児とともに帰国、後にアマゾンでI氏と再婚、ベレン在住。
53. Y.I 旧姓M、熊本県人吉市出身、人吉高校卒業、力行会を通じ、1966年11月アルゼンチナ丸で渡伯、T.Iと結婚、一時サンパウロにいたが、メキシコへ転航。夫は福岡県門司市出身、東山商高卒業、会社勤務3年後、1963年1月力行会に入会、同年5月ブラジル丸で渡伯、レジストロの松村農場に入植、後にメキシコに転航。

[1967年渡伯]

54. F.C 旧姓N、高山？高等女学校卒業、美容師、1965年1月力行会に入会、1967年1

- 月航空便で渡伯、T.Cと結婚。夫は岩手県西磐井郡平泉町出身、一ノ関第二高校卒業、盛岡鉄道局勤務、1959年力行会に入会、同年8月アメリカ丸で渡伯、伯父の洋品店で働く、後に家具店で修業し、1965年より家具店経営。
55. M.U 旧姓O、東京都台東区出身、高校卒業後、1965年5月力行会に入会、1967年5月ブラジル丸で渡伯、N.Uと結婚。夫は東京都台東区出身、中学卒業、家業の衣料品・美容院を5年半の後、1961年3月力行会に入会、同年7月ブラジル丸で渡伯、スザノ石原農園で働いた後、レシフェで花卉栽培。
56. C.Y 旧姓F、佐賀県佐賀郡富士町出身、高校卒業、1964年9月力行会に入会、Y.Yと結婚、1967年6月アルゼンチナ丸で夫とともに渡伯。夫は東京都台東区出身、明治大学卒業、渡伯後、70年ヤマサン商会設立、日本教育用鉱石標本等の輸出を手がける。
57. M.O 旧姓S、東京都中野区出身、短期大学卒業、教職3年間、K.Oと結婚のため、1967年7月アルゼンチナ丸で渡伯、夫とともにイタカセツバで商業。夫は山形県東置賜郡川西町出身、農業短期大学卒業、1958年力行会に入会、力行会で渡航事務、舎監を3年半の後、1961年11月ブラジル丸で渡伯、最初ロンドリーナの箕輪農場に入植、その後雑貨店など営業。
58. K.S 旧姓I、長野県諏訪郡富士見町出身、都立農芸高校卒業、1967年9月ブラジル丸で渡伯、直ちにアルゼンチンのブエノスに向かう。
59. K.G 旧姓M、千葉県松戸高校卒業、力行会を通じ、1967年10月サクラ丸で渡伯、しばらくしてS.Gと結婚。夫は東京都港区出身、日大工学部中退、建設省勤務6年、1961年4月力行会に入会、同年8月アルゼンチナ丸で渡伯、最初カンピナスの花岡農場に入植、その後サンパウロ市に居住。
[1968年渡伯]
60. M.Y 旧姓W、都立第五商高卒業、高等看護学院卒業、力行会を通じて1968年3月アルゼンチナ丸で渡伯、K.Yと結婚。夫は東京都北区出身、成蹊大学卒業、貿易会社勤務後、1966年11月力行会に入会、1968年5月ブラジル丸で渡伯、花卉プラント類販売の後、サンパウロ市で宝石商。
61. J.S 旧姓F、千葉県立野田高校卒業、病院勤務後、1968年3月アルゼンチナ丸で渡伯、S.Sと結婚。夫は長野県伊那市出身、伊那高校卒業。雑誌ラテンアメリカで力行会を知り、1964年入会、1965年9月ブラジル丸で渡伯、アチバイアの横山農場に入植、1968年よりイビウーナで花卉栽培。二男一女あり。
62. C.S 旧姓M、徳島県出身、聖書学院卒業、1968年3月アルゼンチナ丸で渡伯、S.Mと結婚、サンパウロ市内在住。
63. T.K 旧姓F、大阪市福島区出身、高校卒業、1968年8月アルゼンチナ丸で渡伯し、S.Kと結婚。夫は大阪府豊中市出身、関西大学二部卒業、日本住宅公団職員として働く、ここで力行会を知り1965年4月入会、1966年2月ブラジル丸で渡伯、最初モジの竹中農場で働き、各地に転住の後、1974年よりゴヤス州ゴヤニヤで商業。二男二女あり。
[1969年渡伯]
64. S.K 旧姓K、高校卒業、伝道に従事、1969年5月ブラジル丸で夫のM.Kとともに渡伯、トレードの栗原農場にいたが病没。夫は東京都田無市出身、高校卒業、1969年5月力

行会に入会、同月ブラジル丸で渡伯。

65. K.S 旧姓K、高校中退、理容師、力行会を通じて1969年9月ブラジル丸で渡伯、S.Sと結婚。夫は長野県下高井郡野沢温泉村出身、飯山北高校卒業、機械工として3年半働き、1960年8月力行会に入会、同年12月アルゼンチナ丸で渡伯、アリアンサ山田農場、その後各地の農場で働いた後、農場主。一男一女あり。

[1970年渡伯]

66. T.K 旧姓N、長野県上伊那郡高輪町出身、高校卒業、病院会計、薬局助手など2年半勤務、1969年力行会に入会、1970年5月サクラ丸で渡伯、ミナス・カピノポリス在住。

「南十字会名簿」、林寿雄『ブラジル力行会全史』（ブラジル力行会、1992年）、「南十字会だより」をもとに飯田作成。

全体で88名の会員のうち66名、つまり4分の3の割合で何らかの略歴が判明した。

南十字会の発足は1960年の4月なので、それ以前に渡伯した人達は、夫が力行会に入会して渡伯後、夫の呼寄せにより現地で結婚し、会の発足の後、賛同して入会したものと思われる。出身地は全国に亘っているが、やはり東京を中心とした関東地方が多いように思われる。入会前の職業もさまざまであるが、男は農業や自衛隊員、女は看護婦、美（理）容師がやや目立つ。

さて、「南十字会だより」には、各種の記事が掲載されているが、その主なものは「例会記事」、南米開拓講習所の「卒業送別会記事」、「結婚希望者紹介」、「新入会員紹介」、また「新婚者紹介」の記事も時々見られる。第3号（1960年8月発行）には、「ブラジルへの新婚旅行の三夫婦」と題する記事があり、そのうちの2組が、表2中の11および12のカップルである。いずれも茨城・東京の海外協会の斡旋により結婚とある。この頃、各都道府県の海外協会でも海外移住者のために結婚の斡旋を行っていたのである。第4号（同年9月発行）では13の結婚式の記事が、第6号（同年11月）では14・15・16・17のカップルの結婚紹介の記事がみられる。第9号（1961年4月）では21が渡伯前から交際のあった夫がすでにサントスで活躍し、入籍の手続きを終えて、目下呼寄せの状態であることを報告している。

「ブラジルからの便り」では第5号（同年10月発行）と第9号に、会が発足してからの花嫁第一号である10からの便りを紹介している。会の発足以前の人達からの便りとしては、同じ第5号で4から、第8号（1961年1月発行）では7からいずれも出産報告の手紙を紹介しているが、7の場合、夫である南米開拓講習所2期生のT.Sが1954年5月に渡伯し、妻となる同59期生のT.Kを1959年8月に呼び寄せ、サンパウロ近郊のレジストロで借地農としてやっているとの説明も加えられている。また第7号（1960年12月発行）では9のカップルがリオで結婚式を挙げた手紙を紹介している。

このように、結婚は紹介などにより日本で知り合い結婚して渡伯する場合と、夫となる人がすでに渡伯して妻を呼寄せ現地で結婚する場合がみられる。

1961年5月には南米開拓講習所に夜間講習生の制度ができ、南十字会の女性もこの講習生あるいは選択科目の聴講生となって海外事情について研究聴講することが許可された。この夜間講習生は8ヶ月の講習期間で講義は午後7時から9時まで、東京在住者は働きながら移

住教育を受けられ、農家に就職希望者は力行会近くの農家に住み込み勤務し、夜間講習を受けるといふものである⁸⁾。これによって渡伯したのは33の T.T が第1期生、34の K.I が2期生、39の A.N が3期生で、それ以後49、51、54、56、57、61、62、66も講習生としての記録が残っている⁹⁾。

会が発足して約1年半後の1961年11月に規約が制定され、「南十字会案内」が発行された。それによると会の目的は「女性の海外移住を進展せしめ、移住者の結婚の斡旋及び指導をおこなう」とある。会長は開拓講習所の舎監が当たり、その他の役員は会員中より選ばれ、毎月例会等、会務を担当した。例会以外の自治活動として社会ダンス、手芸、卓球、コーラスなどの同好会（グループ活動）が設けられ、会員は必ず1つ以上のクラブに入ることが求められた。また顧問として、力行会会長・永田稔、同理事・西名皆四郎、同理事・永田泉、同幹事・米良ゆきを置き、移住教育、相談、結婚斡旋や機関紙の発行に当たった¹⁰⁾。結婚斡旋希望者は履歴書、健康診断書、写真、戸籍謄本を調べて、永田泉・講習所長に結婚相手を選んでもらったとあり¹¹⁾、彼と力行会の女性職員であった米良ゆきの2人が結婚斡旋に重要な役割を果たしたと思われる。

1965年の『力行世界』に紹介された3人の花嫁の記事によると、23の C.I さんの場合は、子供の頃からの海外への願望があり、1人で渡航するつもりで海外協会連合会に女性の渡航について相談の手紙を出したところ、力行会の南十字会を紹介され、訪問して入会した。勤務の傍ら、参加するうち力行会の先生の勧めで、女性1人での渡航は無理であることが判り、当時同じ講習を受けていた主人を紹介してもらい、結婚して渡伯したとある。

26の Y.K さんは、ブラジル行きの夢から、街頭での花嫁募集の記事で真剣に考えるようになり、ラジオ放送で群馬県海外協会の花嫁募集を知り、手紙を出したところ主人を紹介されたとある。主人と会って相談した結果、力行会の南十字会に入って勉強することになり、勤め先から2時間もかけて8ヶ月通った。渡伯の話が大体決まってから両親に相談したところ反対されたが、自分の意思を通し、農業の経験もなかったので、郊外の農家に3ヶ月実習に行ってから結婚、渡伯した。

42の M.K さんも、以前から海外生活に興味があり力行会の街頭花嫁募集の記事などを見ていたが、家族が八王子に移転したのを契機に、南十字会に入り講習を受けた。1年ほどして家族に見つかり大反対されたが、自分の意思を通した。主人はすでに渡伯しており、力行会の先生の紹介で文通するようになって、主人の熱心な誘いで結婚に踏み切ったとある。

いずれの場合も、もともと海外で生活することに興味があり、力行会などの組織を通じて主人を紹介され、結婚して渡伯、もしくは文通して渡伯し結婚という事例である¹²⁾。

8) 『力行世界』673号 (1961年4月1日発行)

9) 前掲『ブラジル力行会全史』の「ブラジル力行会名鑑」。

10) 「南十字会案内」(1961年11月発行)

11) 前掲『日本力行会百年の航跡』。

12) 『力行世界』第727号 (1965年10月1日)。

3. その後の歩み

南十字会の顧問で、力行会の事務職員であった米良ゆきは、戦後、満州から夫とともに引揚げ、海外の力行会員の結婚の世話に当たり、南十字会の結成後は、その指導に努め、多くの女性を海外に導いた。彼女はブラジルに渡った花嫁たちと手紙のやり取りを続け、二世誕生の知らせが次々と届くにつれ、何か自分に出来ることをしたいと考え、絵本さらに成長するにつれ童話、名作本を誕生祝に送った。また、古本屋などで買い集めた本を日本語学校にもまとめて送るようになり、10箇所ほどの日本語学校に約10年間に3000冊位送ったという。

1968年12月に明治100年を記念して外務大臣より民間の移住功労者43名が表彰された。海外移住婦人ホームの小南ミヨ子や力行会の西名皆四郎そして米良ゆきなどが該当者となった。米良ゆきが表彰されたのを祝ってブラジルにいる南十字会のメンバーが蝶の細工、多くの手紙、そしてアルバム1冊を彼女に贈った。アルバムには南十字会の会員38名とその子供達が67名数えられた。

1978年ブラジル移民70周年の際、彼女は招かれて初めてブラジルなど南米諸国の南十字会員を訪れた。彼の地の家庭・家族の姿を確かめ、その発展を喜んだ。サンパウロでの歓迎会では南十字会員とその家族百数十人が集い、盛会だったという。

現在、南十字会のメンバーがどうなっているのかは分からない。年齢からすると多くが70～80歳代と思われる。ブラジル移民百周年を迎える本年、是非ブラジルまで足を伸ばしその後の彼女達の足跡をたどりたいと思っている。

南十字会は、当時の時代の要請に応じて組織された。実際に花嫁として渡伯した人数はそう多くないものの、ある程度の役割を果たしたものと思われる。

付 記

今年の6月21日にサンパウロで行なわれたブラジル移民100周年記念の式典に合わせて、筆者はブラジルに赴き、サンパウロに5日間滞在した。その際、ブラジル力行会の永田久会長の世話で「南十字会」のメンバー3人にインタビューする機会が与えられた。渡伯会員の21・42・60の方々である。それと昨年11月にブラジル力行会90周年にあわせて行なわれた「南十字会」のメンバーによる座談会の記録もいただいた。これらの詳細については、続篇という形で紹介したいと思う。

